

基調講演2

中央アジア神話と日本神話

マイケル・ヴィツェル(ハーヴァード大学、アメリカ合衆国)

本発表では日本神話を内陸アジアの広大な地域を越えた〈外部の地点〉から眺めてみたい。比較の対象とするのは、インド最古の文献であるヴェーダ、それと緊密な関連を有する古代ペルシア語文献、そして両者の祖先に当たるインド・イラン神話である。

『古事記』、『日本書紀』を北イラン語派(スキタイ)、ギリシア、そして他の西部インド・ヨーロッパ語族などの神話群と比較することは長年、吉田敦彦氏によって行なわれ、多くの成果をあげてきた。しかしながら、インドと日本のつながりは国家成立期以前には想定しにくい。

前 2000 年頃に中央アジアのステップ地帯にいたインド・イラン語派は、東新疆から韓半島北部周辺までの、彼らと隣接する東部の諸集団との間に直接的あるいは間接的な接触を行っていたと思われる。この接触には、初期日本人やアルタイ系の高句麗人と言語的に近い集団や、大陸および日本列島での両者に共通の祖先も含まれていたらしい。その一部が、現在、前 1000 年にまで遡りうると推測されている初期弥生文化である。

ヴェーダ期インドと古代日本は「難民」地域として機能した。古い様式が周辺地域に保存されることは一般的な経験則として認められている。両地域に類似した神話が多く存在する理由はこうして説明できるだろう。

今回の発表では、ヴェーダ神話と日本神話のうち、もっとも関連が明白ないつかを取り上げて比較する。イランと他のインド・ヨーロッパの神話にも言及する。しかし、個別神話モチーフの全世界的規模での比較までは行なわないつもりである。